

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：14501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20247

研究課題名（和文）On educating the teachers of the gifted in Japan

研究課題名（英文）On educating the teachers of the gifted in Japan

研究代表者

LASSILA ERKKI・TAPIO (Lassila, Erkki Tapio)

神戸大学・人間発達環境学研究科・助教

研究者番号：70945360

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：他国と比較しながら、インタビューやアンケート調査、国際視察を行った。教師が才能の教育についてどのように思い、どのような能力を必要としているかを詳らかにした。欧州の国々と異なり、日本では教師育成がほとんど行なわれていないし、才能児のニーズに気付いても、特別扱いを避ける社会文化的な傾向も強い。ただし、教師の考えを調べてみると、才能伸長に対する態度は概ね肯定的であり、個別のニーズへの高い意識や才能教育の基礎知識さえ身につければ、日本でも才能児に有効な指導が実施可能だと分かった。今まで通りの教師教育ならば教員の十分な意識や能力を育むことは難しいため、初期からテーマとして取り上げることを提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
教育のステークホルダー（児童生徒・保護者・世間）の信頼を得て、個別最適なアプローチを活かしながら少しずつ特別な対応の範囲を広げていけば日本でも才能教育が可能になる。
本プロジェクトにより教師教育の役割・身につけるべき資質能力についてのヒントを得て、結果に基づき、具体的なプログラムの工夫が可能である。

研究成果の概要（英文）：Based on interview data, survey data and international research visits and the employment of comparative research approach, this project has uncovered how Japanese teachers think about gifted learners and their education, and what kind of skills teachers need learn to achieve this. As a big difference with many European countries, there is little intentional training on gifted education in Japan and also a socio-cultural tendency to avoid giving special attention to gifted and their individual needs. However, upon investigating teachers' thinking more closely, their attitudes towards talent development are quite positive and if there is heightened awareness of learning needs, it is possible to plan and teach in a way that is beneficial for the gifted learners. Gifted education needs to be made a pertinent theme in teacher education from the start as currently, the teachers cannot develop neither sufficient awareness of the aforementioned needs nor relevant professional skills.

研究分野：教師教育

キーワード：才能教育 教師教育 比較研究 欧州

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

研究活動スタート支援 22K20247

On educating the teachers of the gifted in Japan

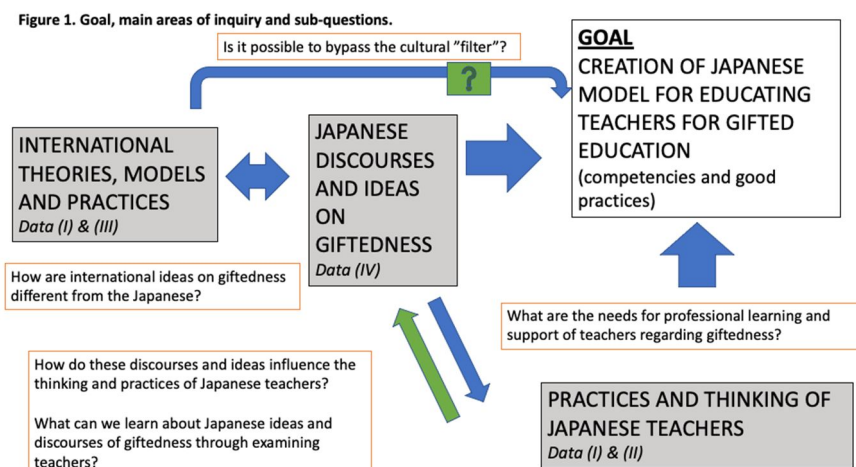
研究代表者：エルッキ・タピオ・ラッシラ、PI：ERKKI TAPIO LASSILA

1. 研究開始当初の背景

近年ギフテッドに対する関心が高まり、SSHのようなSTEM教育に特化した取り組みに並び、文部科学省の有識者会議のまとめ(2022)には「特定分野に特異な才能のある児童生徒」の教育においての方針を示した。才能児や彼らの教育においての考え方が国によって変わり、文化社会的な価値・ノーマが強くリンクされ、また学校教育に関する方針・実践などの影響を受けていることが明らかになっている。才能教育のあり方やそれに関連した才能児のニーズに対応できる教師の育成を工夫する際、このような文脈に関わる要因を明確にする必要がある。日本で才能伸長教育を実施する上で、広い観点では、日本が持つ文化社会的風潮や教育の方針などには才能伸長を支える土壌はあるが、生まれ持ったポテンシャル・能力よりも努力や公平性・平等性を重視する教育システムにおいて才能教育は「例外措置」として大きなチャレンジである(Lassila & Sumida, 2021; Matsumura, 2016; 山内ら 2018)。現場における教員の役割が重要なのは言うまでもないが、ギフテッドへの対応能力を培っておらず、問題意識すらないのが実態である(van Gerven, 2021)。学校教育の軸となる教師の信念・態度も含めた思考とその思考の背景にある社会文化的な状況と学校教育のあり方を探るべきである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、才能児に対応しうる日本の教員を育成するべく、文化的齟齬のないモデルを作成することである。これには次の研究質問への回答を目指す：国際的才能教育の関連研究の成果に基づく優れた実践を、日本においてはどのように社会文化・組織的なあり方と融合させれば、最も効率よく教師を育成できるか？ また、副調査の質問は、以下の図にまとめてある。



目的に、さらに次の4つを挙げる。

(1) 経験的(empirical)目的として、日本人の教員が才能というものをどのように捉えているかを明らかにする。(2) 理論的な目的として、社会文化・組織的なあり方がそれら教師の思考にどのような影響を与えるかを詳らかにする。(3) 実践的な目的として、日本での教師教育(教員養成課程・教員研修)で導入可能な、良質な実践モデルを作成する。

本プロジェクトのインパクトとしては、教員の専門的な発達に貢献することで、才能児がより適切な指導を受けることが期待される。それはひとえに、彼らのウェルビーイングに繋がるであろう。

3. 研究の方法

本研究はナラティブ研究手法を軸に実施する。このアプローチでは、自身や自身を取り巻く世界のあらゆることに関する理解が、調査対象者本人にストーリーを語らせることによって構築される(e.g. Spector-Mersel, 2010)。具体的な分析方法は、副研究のニーズに合わせるが、position analysis (Depperman, 2015) とdiscourse analysis (e.g. Foucault, 2002)を用いる予定である。データとしては、(I) 5カ国(フィンランド、日本、フィリピン、トルコ、オーストリア)での教員養成課程の学生が執筆するストーリーデータ(各国で20-40名のストーリーを収集した。(II) 普通の義務教育の学校、または高校で勤めている教師と才能教育に重視している学校で務める教師それぞれを対象にする半構成的インタビューデータを6名分収集した。(III) 国際視察で観察するモデル、理論や実践である。本プロジェクトでは、イギリス・オランダ・オーストリア・フィンランドへ視察し、学校訪問・専門家とのインタビューを行ってきた。(IV) 才能教育に関わる書籍・先行研究に関わる分析調査も行なった。

4. 研究成果

データIに基づいた研究の結果は、Lassila et al. (2023)にまとめてある。インクルーシブ教育の枠組みで才能児に出会った際にどう対応するかという仮定タスクに対し、以下のようなソリューションカテゴリーが生じた:(1) 才能児にチャレンジ的なタスクを与える(2) 生徒同士の学び合いを促す・才能児をアシスタントとして扱う(3) コミュニケーションを取る(学級・個人のレベル)(4) 学校外の学習機会への誘導(5) 同僚・専門家・保護者・管理職と相談する(6) 教師としての専門的な発展を目指す。いずれも専攻研究でも実践例でもよくあるアプローチだが、対象者の発言の文脈に繋がる、他国の対象者の答えと比較することによってこれらのソリューションが持つ意味、教師を含む学級全体への影響がより明確になった。単純に才能児のスキル伸長・教育的なウェルビーイングを目的として行おうとする行動が大多数ではあったものの、特に1.と2.においては裏の意図が指摘

される。たとえば、チャレンジ的なタスクを与えることには、ただ問題を起こさないように忙しくするといった側面を含む回答が見受けられた。ここから教師の信念・態度が垣間見える。日本人とオーストリア人のストーリーには、学級全体が才能児の個人的なニーズを優先する傾向が最も強く、他3カ国の対象者よりも特別扱いを避けようとする意識が明白である。現状の教員養成課程で才能教育を学ぶ機会に恵まれなければ、教員として現場で適切に対処できない懸念があり、教員養成課程の段階で才能教育に触れておくことが望まれる。

データ II に基づく副調査の結果は、2024年の秋、教師教育学会の全国大会で発表する。才能児と彼らが受けるべき指導についての考えを先行研究と照らし合わせながら、学校教育で才能教育を実施する上での障壁と展望を明らかにする。結果、平等意識が高い国ほど有効である個別最適パラダイム (Dai&Chen, 2014) に近い、選ばれた児童生徒のみならず、全ての学習者のニーズに答えよとする枠組みで才能伸長に対する態度は概ね肯定的であることが分かった。調査校の場合、学校長のリーダーシップによって各教員なりの指導や学習の個別化は実施しやすい環境であるが、教師としての信念や指導スタイル、周囲への同調圧力および社会文化的な常識などが、縛りとして指摘される。今後の教師育成に才能教育の観点で早期から導入するには、学校の組織的限界や可能性についての知識をも育てる必要がある。

データ III オランダではインクルージョンパラダイムの元、基本的に「才能児」を指摘し認定するのではなく、対応されていない(教育的な)ニーズを探すアプローチが一般的である。一般の教室にも才能児のための学びの個別化がよく行われている。ただし、ガイドラインが表立ってないために対応はまちまちである。教師に必要な資質能力に関する考え方として驚かされたことに、カリキュラム編集スキル・特定の教え方(教授学)・特定の分野での高い知識などよりは、優秀な一般的な教授法スキル (pedagogical skills)、教師-生徒-家庭の関係での信頼、才能児の教育に関係する者間のコミュニケーション、個人のニーズを把握すること、思考や行動の柔軟性などが重視されていることがある。地域のレベルでの才能児を対象とする「取り出し型教育」も参考になった。才能教育について勉強する機会は公立でも私立の教育施設でもたくさん提供されている。オーストリアでは、夏休みの終わり頃に1週間の泊まり込みで催行される、才能児向けプログラムを訪問調査した。事前診断を要するこのサマースクールは、すべての参加者が二つの科目に申請し(アート、化学、演技、宇宙学など) 拡充活動に参加しながら、自由課題・指導者が用意したタスクをやりこなしていた。知識的に刺激が多いようだが、それより重要なこととして、この機会のソーシャルな側面、即ち同じ種類の人間と年一回だけでも接する機会を持つことによる、孤独感の解消を見逃してはならない。この効果は、オランダ・オーストリア両国において才能児自身の幸福のみならず、本人らの知識的、人間的発達を考える上でも大きな意味を持ち、このようなアプローチは日本での全人教育との調和が高いことが見込まれ、大いに参考しうる。

データ IV に基づく副調査は実施継続中であるが、先行研究にあたっていく中で明らかになったことを他の副調査にリンクさせ、それがプロジェクト全体の成果に繋がっている。日本

での教師の才能教育に対する役割・資質能力に関する研究や議論の少なさというのは、才能教育が若年分野である証でもあるが、教員育成や専門的な発達という観点が蔑ろにされる傾向が、他の教育改革の側面からも頻繁に見られることを踏まえると、深刻な見落だと思われる。

まとめ 欧州の国々と異なり、日本では教師育成がほとんど行なわれておらず、才能児のニーズに気付いたとしても、特別扱いを避ける社会文化的傾向が強い。しかしながら、教師それぞれの考えを探ってみると、才能伸長に対する態度は概ね肯定的であり、個別のニーズへの高い意識や才能教育の基礎知識さえ身につければ、日本でも才能児に有効な指導の将来性が見込まれる。平等意識が高いオランダと同じように、インクルーシブパラダイムを元に教育のステークホルダー（児童生徒・保護者・世間）の信頼を得、個別最適なアプローチを活かしながら少しずつ特別な対応の範囲を広げていくことで、日本でも才能教育に取り組むことは十分に可能であると思われる。広げて、得意な領域で特別な才能を持つ児童生徒の集まる一時的な活動（Dai&Chen 2014 の才能伸長パラダイム）に広げていくことにも期待したい。本プロジェクトにより教師教育の役割・身につけるべき資質能力についてのヒントを得、またその結果に基づき、具体的なプログラムの工夫を見込んでいる。本プロジェクトの続きとして、3年間の研修プログラムを実施できるための予算を申請し、確保できた。従来の教師教育では、教員の才能教育への十分な意識や対応力を育むことは難しいため、教員養成課程の初期からテーマとして取り上げることが提案する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Lassila Erkki, Hyry-Beihammer Eeva Kaisa, Kizkapan Oktay, Rocena Angela, Sumida Manabu	4. 巻 67
2. 論文標題 Giftedness in Inclusive Classrooms: A Cross-Cultural Examination of Pre-Service Teachers' Thinking in Finland, Austria, Turkey, the Philippines, and Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Gifted Child Quarterly	6. 最初と最後の頁 306 ~ 324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/00169862231183652	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Lassila, E.T.	4. 巻 47
2. 論文標題 才能教育の場としての科学館 フィンランドと日本での事情の分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本科学教育学会年会論文集	6. 最初と最後の頁 635-638
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14935/jssep.47.0_635	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Lassila, E.T., Hyry-Beihammer, E.K., Kizkapan, O., Rocena, A., & Sumida, M.
2. 発表標題 Pre-service and In-service Teachers Situating Themselves in Inclusive Classrooms with Gifted Students: Gaps Between Teacher Thinking and Evidence-Based Practices
3. 学会等名 European Council for Educational Research (ECER) 2023 Conference
4. 発表年 2023年 ~ 2024年

1. 発表者名 Lassila, E.T.
2. 発表標題 才能教育の場としての科学館 フィンランドと日本での事情の分析
3. 学会等名 日本科学教育学会第47回年会
4. 発表年 2023年 ~ 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2024年3月21日World Council for Gifted and Talented Children (WCGTC) webinar “Leveraging training opportunities to enhance gifted and talented education instruction” オンラインシンポジウムの招待されたパネリスト

諸外国における「才能教育」の現状と日本の課題」才能伸長研究会のキックオフセミナー、神戸大学、2023年7月29日、【講演】

Lassila, E.T., Hyry-Beihammer, E.K. (査読中). Lahjakkaiden opetus inklusion haasteena. [才能児の扱いがインクルーシブ的教育にもたらすチャレンジ]. Kasvatus (ジャーナル名) 【フィンランド語】

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	エーバカイサ ヒュルバイハンマー (Eeva Kaisa Hyry-Beihammer)	アッパーオーストリア教育大学・Faculty of Education・Professor	
研究協力者	隅田学 (Sumida Manabu)	愛媛大学・教育学部・教授 (16301)	
研究協力者	オクティ・キズカパン (Oktay Kizkapan)	ネブセヒリハジベクタスベリ大学・Faculty of Education・Associate professor	
研究協力者	アンジェラ・ロシェーナ (Angela Rocena)	フィリピン大学・Integrated School・Assistant professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------